

石見銀山遺跡 ニュース

Newsletter of the Iwami-Ginzan Silver Mine Site

NOVEMBER 2002 NO.4

平成14年11月1日発行 第4号

島根県・大田市・仁摩町・温泉津町教育委員会



>> Contents

page	2	街道調査はじまるー銀・人・物の往来を支える道ー	藤岡大拙
	3	街道調査 (1) 民俗調査 多田房明 (2) 文献調査 佐伯徳哉 (3) 建造物調査 浅川滋男 (4) 石造物調査 宮本徳昭	
	6	総合調査から (1) 遺跡発掘調査 中田健一 (2) 古文書・文献調査 佐伯徳哉 (3) 石造物調査 池上悟	
	8	第1回石見銀山講座 大門克典	
	10	鍔絵の魅力② 渡部孝幸	
	11	町並みを歩く (4) ～修理の現場から～	西村崇司
	12	「石見銀山遺跡」の魅力 福代光秀	
	13	資料紹介⑥大久保石見守長安の書状	松岡美幸
	14	文部科学委員会視察 (福代) 石見銀山遺跡調査活動日誌抄	

〔仙ノ山(手前)山頂付近は石銀地区と山吹城跡(画面仙ノ山やや上)空撮〕

— 銀・人・物の往来を支える道

島根女子短期大学長 藤岡 大 拙



石見銀山遺跡本体の調査研究は順調に進展し、その姿が次第にはっきりと浮かび上がってきました。それにもなつて、周辺遺跡の調査が必要になってきます。街道調査もその一環であり、一部事前調査をうけていよいよ今年度から2か年計画で総合的に調査が始められることになりました。

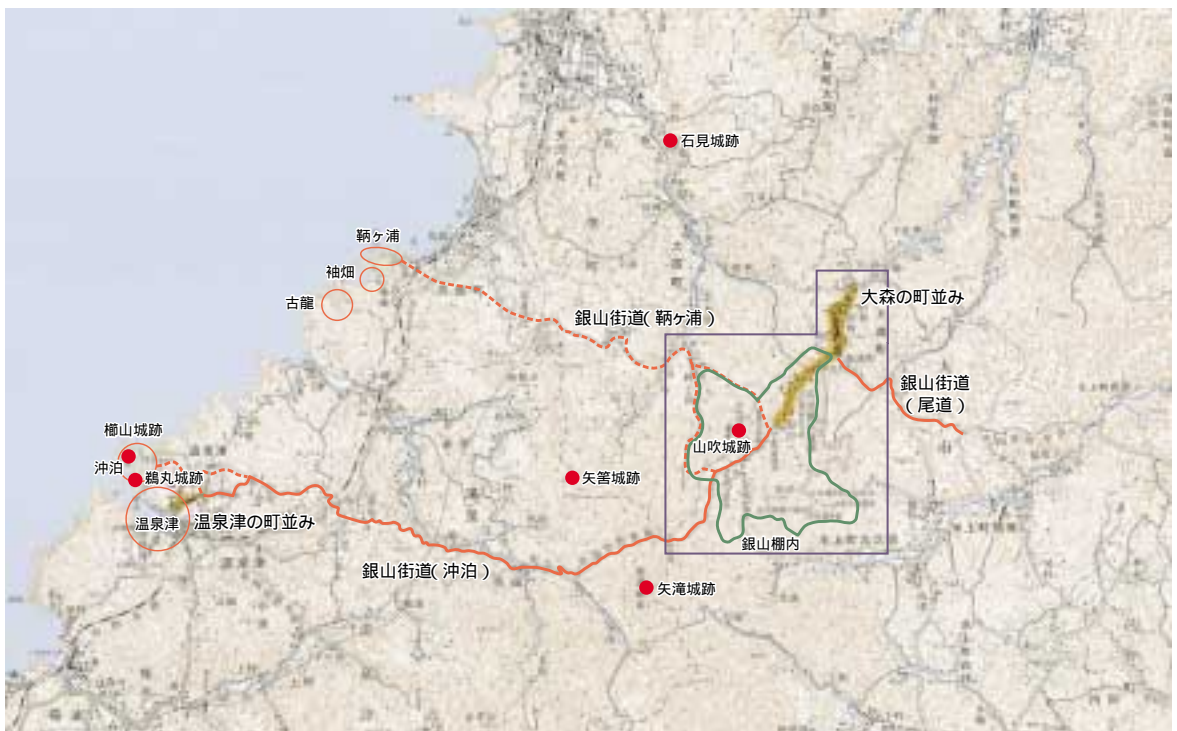
銀山街道は3つあります。銀山が開発された当初のころ、すなわち16世紀前半のころは、銀山・石銀地区で掘り出された鉱石は、清水谷 - 大國 - 柑子谷 - 馬路を通過して鞆ヶ浦または古柳に搬出され、博多へ積みだされました。

毛利氏が支配する16世紀後半になると、銀山の隆盛にともない、より規模の大きな港である温泉津が利用されるようになり、銀山 - 坂根口 - 降路坂 - 西田 - 松山 - 沖泊というルートが整備されました。

江戸時代になり、銀山が徳川幕府の直轄地に編入されると、銀山街道は陸路にかわり、赤穴峠を越えて山陽の尾道に至るルートとなりました。

今回の調査は、初期のルートである日本海側の港に至る街道を対象とする計画です。なによりも道順を明らかにすることが必要ですが、資料の不足等もあって困難が予想されます。しかし、国指定に編入してもらうためには、ぜひコースを確定したいと思っています。それとともに、街道をめぐる歴史的背景や沿道住民の生活実態なども調査し、銀山といろいろな形でかかわってきた人々の姿を生きぼりにしてみたいと考えます。そのことにより、石見銀山の総合調査に厚みをつけることになるでしょう。

この街道調査はわれわれ調査員だけで達成できるものでもとよりありません。地域住民の皆さんの積極的なご支援があつて、初めて達成できることなのです。



(1) 民俗調査

多田 房明

はじめに

今回の調査は、銀山から沖泊に至る街道（沖泊ルート）と鞆ヶ浦に至る街道（鞆ヶ浦ルート）を対象としています。沖泊ルートについては、県教育委員会によって『歴史の道調査報告書・銀山街道（平成8年）』や『石見銀山遺跡総合調査報告書第6冊・街道調査編（平成11年）』が刊行され、調査が進んでいます。一方、鞆ヶ浦ルートについての調査報告書は刊行されていません。そこで、平成13年度までに行った鞆ヶ浦ルートの調査概要を記します。

平成13年度までの調査概要

戦国末期、銀の積み出しや物資輸送が降路坂を越えて沖泊（温泉津）経由で行われるようになると、鞆ヶ浦ルートの交通量は激減し、あまり利用されなくなると推定されます。そのため、今日では、街道がどこを通過していたのかははっきりしていません。しかし、元和3～5年（1617 - 19）制作の「石見国絵図」（浜田市教育委員会所蔵）には、銀山「はた（畑）口屋」から高山山麓を通り、馬路に至る街道が記されています。そこで、明治時代の地籍図や地



西谷・道面から稜井戸へ（馬路地区）。林の中の道を進む

元調査協力者への聞き取り調査から、『鞆ヶ浦ルートは、要害山（山吹城）の鞍部に位置する吉迫口・畑口という二つの口番所から柑子谷（大国地区）に一度下り、その後、再び高山山麓の上野集落に登ってから村境の口屋峠を通り、馬路地区西谷集落を経て鞆ヶ浦に至った。』と推定し、平成11～13年度に現地調査を行いました。

1. 銀山～口屋峠まで（大国地区の調査）

一部、かつての往還道が林道に拡張されて舗装されているものの、全体として道の保存状態は良い。特に、「水が迫」一帯は、つづら折りに岩盤を削りだして道をつけたり側溝を刻んだ跡が残っています。推定ルートに沿って、「名号石」や「胴地蔵尊」などの石造物、石切場跡、小笠原家などの旧家が存在します。賑わった往時を伝える伝承も多く残っています。

2. 口屋峠～鞆ヶ浦まで（馬路地区の調査）

高山周辺（西谷集落～鞆ヶ浦間）の推定ルートは山地化しており、通行が困難で、明確なルートを設定することができませんでした。しかし、つづら折りに道を削りだした箇所や土橋状に尾根を加工した箇所、山肌に道がU字形に深く刻まれた箇所などが、断続的に残っており、街道の存在を推定させます。瓦窯跡や屋敷跡と思われる石垣も確認されました。

今後の課題

口屋峠～鞆ヶ浦間（馬路地区）の推定ルートについては、さらなる検討が必要です。また、推定ルート以外に、柑子谷の「板屋迫」から「松籠」を登って冠集落経由で上野集落に至るルート（大国地区）や高山山麓の西谷集落から琴ヶ浜まで下って鞆ヶ浦に至るルート（馬路地区）など、複数ルートの存在を検討する必要があります。

(2) 文献調査

佐伯 徳哉

街道の痕跡と、街道をとりまく歴史的環境を明らかにする目的で、県内外で調査を展開しています。

鞆ヶ浦ルートと沖泊ルートの調査のうち、今年度前半のところでは鞆ヶ浦ルートの手がかりを入手することに重点を置いています。まず、古絵図・古地図の搜索。旅日記・戦国期の戦記類などのデータ収集を行いました。

鞆ヶ浦ルートは、16世紀前半、周防山口の戦国大名大内氏が石見国の守護職であったころの銀鉾石の



元和『石見国絵図』浜田市教育委員会蔵（馬路付近）

積み出しルートであったとされます。しかし、このルートは、16世紀の半ば以降、毛利氏が石見を支配するようになって概ね温泉津沖泊方面が幹線交通路になり、積み出しルートとしての地位を低下させたか、もしくは失った可能性があります。そのせいか、沖泊ルートに比べて、現状では、かなり手がかりが少ないのです。

この地域に関する現存最古の古絵図は、江戸時代初期の石見国絵図（元和図とも呼ばれる）ですが、そこには、馬路から高山の裾を越えて、銀山の「はた口屋」に至るルートが鮮明に描かれています。しかし、それ以後の石見国絵図（正保図・天保図など）にはこのルートが見えなくなります。一方、この地域を描く絵図類には「はた口屋」と考えられる銀山側入り口が見えることから、やはり、同口屋につながる通路が、主要ルートとしては脱落したものの、ともかくも残っていた可能性は否定できません。考えてみれば、「国絵図」は、幕府が諸藩に命じて作成させた公的 성격の強い絵図ですから、政治的に重要なルートを記載し他は省いたと考えるのが妥当でしょう。

とすれば、元和図を最初の手がかりにして、以後の古絵図・明治初期の切図などに、通路の痕跡を捜すことは、次の作業として有効性を持っていると考えてよいでしょう。

明治初年のこの地域（馬路付近）の切図は、広島大学中央図書館所蔵の「中国地方土地租税資料台帳」の内に残されており、江戸時代における地域の生活道路を窺うことができます。

しかし、何よりも重要なのは、地域の皆様のお宅に、絵図・切図・交通に関する記録が残されていないかということです。村の歴史を伝えるこれらの史料の中に、銀山との往来を記すものが、たくさんあるのではないかと推測します。地域の皆様の御協力

をいただきながら、銀山と港を結びつけ、かつて地域の発展を支えた交通路の手がかりを捜していきたいと考えます。皆様、調査につき、よろしく御協力下さいますようお願いいたします。

(3) 建造物調査 鳥取環境大学 浅川 滋男

8月28日から31日までの4日間、1回目の建造物調査をおこないました。初日は午後から仁摩町甘子谷の鉱夫長屋（中本家）を実測しました。石見銀山は大正12年に閉山しましたが、昭和12年に軍が再興を命じたので、試験掘りをおこなうために、この長屋



仁万天河内 満行寺

を建てたといわれています。ところが、昭和18年に水害が発生し再び廃鉱、鉱夫長屋はただの長屋となりました。現存する建物は4戸1棟の平面で、1戸は畳部屋二間に玄関のみの素朴な間取りです。29日は、仁摩町天河内の玉蓮山満行寺と温泉津町の渡利家住宅を調査しました。満行寺は石東最大の真宗寺院で、多数の棟札を残し、堂宇の建立・改修年代がほぼあきらかになっています。本堂は文政3年（1820）の建立、屋根葺替以外に改造少なく、当初の姿をよく残しています。経蔵も同年の建立といいますが、大正年間に大修繕がありました。ただし、内部の八角厨子は当初のままのようです。とくに注目されるのは、元文4年（1740）の棟札を残す山門で、丸みをおびて端正な虹梁絵様も18世紀中頃の様式とみてよいでしょう。渡利家では大森街道沿いの大型住宅で瓦葺入母屋造の外観から明治中頃の近代和風建築かに思われましたが、調査の結果、瓦葺の屋根は葺替であり、もとは18世紀に遡る茅葺き民家であるということがあきらかになりました。江戸時代には銀山代官の休憩所であったと家伝に伝えられています。二種類の式台、座敷奥の湯殿、代官所を真似て作ったという

門など、たしかに陣屋風の構えをみせています。30日は温泉津町沖泊の酢谷家住宅、同町湯港の西村家住宅を調査しました。これら日本海リアス式海岸の入江に展開する集落は、いずれも漁村ではありません。船をもっている漁業用ではなく、曳船業を営むため、大阪などへの出稼ぎが多かったそうです。また、温泉津などで旅館業や左官業を営む住民も少なくありません。いまは人口が減り、酢谷家も西村家も空家になっています。酢谷家は明治中頃の建築で、四間取りの主屋と土蔵を連結し、両者の前面に通庇をかけて一体感を示しています。西村家は大正末頃の建築と推定されます。急峻な崖を巧みに利用した独特の建物で、主屋の正面に小さな中庭を作り「客殿」と繋いでいます。最終日の31日は仁摩町大国の小笠原家住宅の平面と配置を略測しました。小笠原家は昭和44年の民家緊急調査で報告されています。その解説によれば、文政元年（1818）の建立といえます。近年茅葺屋根を鉄板で覆うとともに、土間部分の改装をおこなっていますが、主要構造部分や造作に改変は少なく、民家のリニューアル作品としても一定の評価を与えられるでしょう。

(4) 石造物調査 宮本 徳昭

石造物調査は、石見銀山街道調査の一分野として街道沿いにある石造物を対象に実施しています。

石造物調査班は、現時点で両ルート of 石造物を実見確認し、沖泊ルート of 大概の実測・写真・拓本を終了したところです。石造物の種類は、地蔵像・名号石・五輪塔・宝篋印塔等があります。数量には若干の差があるものの、両ルートにはほぼ同じ種類の石造物がみられます。

沖泊ルートの調査で判明している事をいくつか紹介します。沖泊から松山の道標までは、道が数ルー



副道夷険碑ほか3基の石碑が並ぶ西田地区

トあり周辺に数多くの石造物が、天正在銘から見られます。港間近、正念寺裏にもと曾根の集団墓地にあった「曾根の地蔵さん」（立像）があります。この台（基）石は、享保8（1723）年銘「桜御影」といわれる瀬戸内産の石です。同じ石材は、近くの恵比須神社鳥居、曾根の集団墓地に2基の角塔（1基 - 白）があります。

国道9号を越えて山中から県道湯里停車場祖式線に合流し、まもなくの県道脇に名号石があります。上下2つに折れ、上部は下部の裏に倒れていました。この側面に「右八ゆさとみち」・「左はゆ能つみち」と刻まれ、道標の役割ももっています。

西田集落に入ると「副道夷険」碑が、他の2碑とともに建っています。文化4（1807）年、堀藤十郎伴徳と藤井与兵衛義孝は、西田周辺の悪路を私財を投じて大改修しました。この功績を文化8（1811）年、佐和淵（華谷）が文、子息世魚の書としてあらわしています。石工は、「福光住坪内伊平太只氏」です。

西田集落の往時の姿を良く残している景観地中央、「火伏せの観音様」と呼ばれ、岩窟に数多くの石造物とともに安置されているところがあります。奥壁中央に観音様、下手に無縫塔と名号石があり、三つの壁沿いに五輪塔・宝篋印塔の部材が置かれ、現在も法要が営まれています。

西田集落の主街道と反対側の寺社に興味深いものがあります。清願寺境内、嘉永3（1850）年に建立されたという15世の墓とされる五輪塔には、「石工市右工門」・「坪内末乃之建」と刻まれています。水上神社の鳥居は、尾道産白花崗岩製で「右大工尾道町山根茂三郎」と刻まれ享保9（1724）年のものです。

西田集落から降路坂への入口近くに「七曲り」があります。道は、細い尾根と谷の間を縫うように残っています。この道の上に「渡辺太郎左衛門通」墓とされる石造物が3基あります。2基の一石五輪塔は、各々台石を伴い残りも良好です。円頂方形型角塔1基は、「天文四未天」銘があります。

以上、簡単に紹介しましたが、明らかに原位置がずれている物、街道の新旧ないし主従が予想されるものが種々あり、今後検討する資料となりました。また、物質交流を考えさせるものもあります。未だ見落としがあると思いますが、第一歩としたいと思います。

参考文献 島根県・大田市・温泉津町・仁摩町教育委員会
『石見銀山遺跡総合調査報告書 平成5年度～平成10年度』1999
大田市外2町村広域行政組合『銀山街道ガイドブック』2001

(1) 遺跡発掘調査 大田市教育委員会 中田 健一

今年度は、出土谷、於紅ヶ谷、竹田の3つの地区で発掘調査を行っています。

佐昆売山神社奥の出土谷地区では、18世紀後半の建物跡の調査を行っています。建物北側にある坑道が同じ時代に採掘されていて、永久鋳床の鋳石を製錬したことが確実な場所であることがわかっています。建物跡には、当時の製錬の炉跡がそのまま残っており、銅を含んだ永久鋳床の製錬の様子を知ることができます。



出土谷地区



竹田地区

於紅ヶ谷、竹田地区は仙ノ山山頂に近い標高450mほどの場所にある調査区です。時代はいずれも16世紀代～17世紀前半で、銀山が最も栄えた時期の様子がわかる場所です。於紅ヶ谷地区では下層の確認を行い、地表下2mに岩盤を加工した遺構を確認し、謎の多い銀山開発当初の歴史の一端を窺えます。

竹田地区では、幅2mの発掘調査坑（トレンチ）にて調査しています。上から見た形が丸や四角などいろいろな形状の製錬遺構を検出しました。

発掘調査の成果を公表する現地説明会は11月中頃に予定しています。

(2) 古文書・文献調査 世界遺産登録推進室 佐伯 徳哉

今年度から、銀山に関する古文書で未活字（印刷刊行されていないもの）で未発見のもの、かつてその所在が知られていたが、現在行方不明になっているものの所在と概要を把握する調査に力を入れることにしました。まずは、島根県教育委員会の職員がこの調査にお伺いすることがありましたら、御協力をいただきますようお願いいたします。



小笠原長雄感状(1559年3月、毛利方が小笠原領に迫る)
(清水米太郎旧蔵文書)

島根県における古文書・古記録類の調査が最も網羅的に行われたのが、明治末年から昭和初期にかけて行われた旧『島根縣史』の編纂においてでした。当時、野津左馬助氏をはじめとした編纂者たちが、県内外において影写本（文書の精密な模写）などを作成しながらデータ収集にあたりました。しかし、この時、調査先にあった古文書のデータを全部収集

したわけではなかったと考えられます。この中にも銀山関係の古文書が多く含まれていたにちがいません。従って、長期的視野に立って再度の調査が望まれるところです。しかし、過疎問題がこのことと深くからんできます。つまり、調査以来80余年の間に、かつての古文書所蔵者の御子孫が地域から出てしまわれることで、古文書の行方もわからなくなったといったケースが多々あるのです。

前置きが長くなりましたが、県内外において調査を実施し始めましたが、今回は、仁摩町内で実施した調査から、行方不明文書に「再会」できた経験を、ちょっとだけ、ご紹介したいと思います。

「清水米太郎氏旧蔵文書」「森木理作氏旧蔵文書」。これらは、銀山争奪戦と深く関わった石見小笠原氏の歴史を伝える古文書ですが、筆者が、天河内の満行寺さんにおいて確認することができました。初めて現物を見た筆者は、離ればなれになった肉親と何十年ぶりかに再会したかのような気分で、「感涙もの」でした。

満行寺の先住職様、心より感謝いたします。

(3) 石造物調査 立正大学考古学研究室 池上 悟

平成14年度の石造物の調査はお盆過ぎの8月25日からの一週間、真言宗・長楽寺跡を中心として実施しました。標高300mほどの谷からはやや奥まった尾根上に立地する旧境内地と隣接する高所に所在した歴代住持墓地、尾根に従って背後に形成されていた墓地を対象としました。確認総数は213基と従来調査地点と比較すると少数ですが、これは背後の墓地が既に片付けられていたことによります。

歴代住持墓地は円筒形の無縫塔を中心として、中に古い年代の墓石の破片が混在する程度で、背後の墓地では頂部を円く仕上げた方形の墓標が主体をなしていました。最古の年代が認められたのは、戦国時代末期の文禄3(1594)の組合せ宝篋印塔の基礎で、この頃から寺院に伴って墓地が造営されたことが知られます。江戸時代では17世紀の中葉以降に数を増し19世紀初頭が最盛期となっています。特に留意される墓標は、石材として山石を用いた、一見柄かともみまがう台座と一体となった先端の尖った高さ30cmと低い方柱状のものです。正面を浅く掘り窪め中に十字形を刻んでいます。

境内の背後に形成された墓地では、従前の調査で



長楽寺跡



確認されてきた特定の宗派に限定された墓地のみではなく、各宗派に属する墓石が確認されました。これは背後の墓地が共同墓地として形成されたものと考えられるところです。

本年度は長楽寺墓地以外に、浄土真宗・西性寺墓地に所在する銀山「地役人」であった宗岡家・河嶋家墓地も調査しました。銀山の多くの寺院墓地に認められる庶民の墓石とは異なり、世代ごとに区画・整理されて現在に続いている様相が把握できました。

本年度までの石造物調査では多くの成果を挙げたところですが、決して十分ではありません。今後とも体制を整えての継続調査が強く望まれるところです。

後継者の育成を目指し

第1回石見銀山講座が開催！

大田市外2町広域行政組合 企画担当 大門 克典

8月19日(月)～23日(金)、全国から歴史・考古・建築等を専攻する44名の大学生・大学院生が参加し、国立三瓶青年の家を主会場に第1回「石見銀山講座」が開催されました。この講座は、従来の一般向け講座とは異なり、将来の石見銀山遺跡の研究者を育成する目的で、大学生及び大学院生に調査研究に触れる機会を提供しようと計画しました。

講師は、石見銀山遺跡を中心に国内の著名な遺跡を手がけてきた6名の研究者でした。

初日の開講式では、地元の藤岡大拙氏（島根県立島根女子短期大学学長）に、「戦国時代と石見銀山」と題して銀山の歴史と盛衰について基調講演をしていただきました。

2日目からは、各論の講座がはじまりました。トップは、文献調査の田中圭一氏（元群馬県立女子大学

教授）に、調査の成果から「石見と佐渡」と題し、鉱山史について講義していただきました。続いて、鉱床学の井澤英二氏（元九州大学教授）には、「日本の地下資源」と題して、天然資源としての石見銀山の特徴と価値について講義していただきました。午後からは、冶金考古学やきんの小池伸彦氏（奈良文化財研究所調査官）に、「製錬と精錬」と題して、日本の著名な遺跡の成果から、冶金技術の解明と石見銀山の特徴、さらに今後の調査について講義していただきました。

更に、この日の夜は会場を大田市内の「あすてらす」へと移し、一般公開講座「世界遺産とまちづくり」へ参加しました。会場は、圏域住民や受講生、さらに行政職員を含む250名で埋まりました。講師には、世界遺産について国内で最も事情に詳しい西



於紅ヶ谷地区の発掘現場で説明を受ける様子
(3日目フィールドワーク)



町並み最大の民家旧熊谷家で解体修理作業を見学
(3日目フィールドワーク)



灰吹法原理の実演を見学（3日目）

村幸夫氏（東京大学教授）を迎え、来るべき世界遺産登録にむけ、遺跡を守り伝える住民の心構えを世界の先進事例を紹介して解りやすく講演していただきました。

3日目は、現場担当者の案内で大田市・温泉津町・仁摩町の石見銀山遺跡を巡るフィールドワークを行いました。講師とスタッフを含めた参加者は二班に分かれ、仙ノ山山頂からスタートするコースと、町並み（熊谷家）からスタートするコースで出発しました。いずれも、午前中は町並み最大の民家・旧熊谷家、武家屋敷・河島家、仙ノ山山頂上の石銀地区、^{あべにがだに}於紅ヶ谷地区、本谷を下って大久保間歩、観光坑道・龍源寺間歩に^{だしつちだに}出土谷遺跡を見学し、午後からは仁摩町の鞆ヶ浦と温泉津町の沖泊湾を見学しました。各現場では、受講生から活発に質問が飛び、現場担当者が丁寧に回答し、講師の先生方が様々な観点から評価し考察する光景が見られました。

4日目は、歴史材料科学の村上隆氏（奈良文化財研究所調査官）に「近世金属生産遺跡の科学的調査」と題して科学調査の講義を学んだあと、特殊装置の蛍光X線装置を使い実際にどうやって科学調査が行われているかを体験しました。午後からは、戦国考古学の小野正敏氏（国立歴史民俗博物館助教授）に、「戦国時代の考古学」と題して、先生の手がけられた福井一乗谷遺跡の発掘成果を中心に、中世の都市の特徴や機能について講義をして頂きました。

この日の夜は、現場担当者による夜学講座が行われました。発掘調査は大田市教育委員会の遠藤浩巳



▶村上隆氏による講義（4日目）



公開講座「世界遺産とまちづくり」（講師：西村幸夫氏）

氏、町並みは大田市建築住宅課長の渡部孝幸氏により、調査の進捗状況や現場の最新情報など興味深い話を聞きました。受講生や講師の先生を含め忌憚のない意見交換が時間一杯行われました。

最終日、閉講式では石見銀山講座の総合監修を頂いています石見銀山発掘調査委員会委員長田中琢氏に、講座の講評をいただきました。最後に「皆さんは、研究者としてスタートラインが見えたところです。ゴールに向かって走ってください。」と激励をしていただきました。残暑厳しい8月の末、4泊5日で行われた「第1回石見銀山講座」は、石見銀山に関わる人々が1年間模索した成果と次年度へ向けた課題を残し幕を閉じました。

鍍絵の魅力

渡部 孝幸

鍍絵というままで誰も見向きもしなかった近代化遺産(?)に、ここ8、9年のうちに案内した人は、数百人に達するでしょう。

大田市から仁摩町、温泉津町、邑智町、川本町にかけて点在している主だったところを案内していますが、まとまってあるところが少ないため、半日から一日がかりのツアーになります。

「見たい!」と声がかかると、仕事を休んでも案内してしまう悲しい性に、自分ながらあきれほどですが、近代建築の礎を担ってきた彼ら石州左官の業績をこのまま埋もらせてはならない、後世にきちんと残さなければいけないという気持ちがそうさせるのかもしれませんが。

金毛九尾の妖狐



完成度の高い彼らの作品は、驚きとともに優れた評価を、案内するたびにいただくことが多く誇りに思うこともしばしばです。

そうした優れた鍍絵の一つが、仁摩町は潮川河口、港近くの西往寺にあります。西往寺は、小高い山を背にして町並みより一段高い境内地に建つ比較的小さな伽藍です。近づくときの暗い本堂正面向拝の奥から、今まさに飛び出してくるんじゃないかと、迫力ある漆喰による彫刻群が見えてきます。本堂正面の差鴨居上部の小壁、4間の間口いっぱい、向かって真ん中は雌雄の「龍」、右手には「安珍清姫」、左手には「金毛九尾の妖狐」の三つの作品が彫刻されています。鍍絵の妖しい世界にのめりこむきっかけになったのは、これらの作品に出会い強烈な印象を受けてからであります。

6年前案内した作家の荒俣宏さんも度肝を抜かれ、「超3D」だと感嘆の声をあげられ、鍍絵の範疇を越えてるとも。

「安珍清姫」の作品は、まさにそうです。この作品は、説話や歌舞伎などで知られる「娘道成寺」のクライマックスシーン。旅の僧安珍に裏切られた清姫が憤怒の果てに蛇身に変じ、鐘の中に隠れた安珍を鐘ごと愛欲と恨みの炎で焼く尽くす、すさまじい場面です。

この鍍絵に出会ってまもなく蛇身の尻尾の一部がくずれ落ちました。調べてみるとたたいた藁を一定

の太さに束ねて針金で縛りその周りを砂漆喰で整え、漆喰で上塗りしてありました。その砂漆喰や漆喰には麻や和紙が筋としてよく混じりあって繊維質のようになっていました。はがれ落ちたのは、針金が錆びたのが原因のようです。

背景には、「明治三十六年十月吉日」「奉寄進」という文字と「安田伊三郎」という左官の名前が見えます。伊三郎は「龍」を作った安田鹿市の末の弟で、兄の鹿市の「龍」を見て「わしも作る」といって挑戦したといえます。このとき弱冠24歳。作品への執念を感じ、鬼気迫るものがあります。残念ながら、28歳の若さで四国で亡くなっています。天はこの天才になぜ長寿を与えなかったか、実に惜しい。

「金毛九尾の妖狐」も彼の作品とされます。背景の文字が消された跡があり不明ですが、謂い伝えや鍍削きから彼の手によると思われる。この妖狐は鳥羽天皇の寵姫・玉藻の前に化け多くの人を害したが、正体を見破られて下野国那須野原で射殺され石に封じ込められます。しかし通りかかった玄翁和尚が法力で石を砕き成仏させます。「御伽草子」の中のお話で和尚に別れを告げ、昇天していく狐の表情がなんとも印象的です。

中央の雌雄の「龍」は、幅3.8メートル、高さ1.2メートルの大きさで、漆喰塗りの額縁の中に納まっています。青い背景が今も鮮やかで細部まで工夫が凝らされ、見る角度を考慮に入れた鍍削きに感嘆します。神聖な感じを抱かせる作品です。

その両脇の柱に打ち付けられた短冊状の杉板には二人の左官職人の名前と作られた年代が墨書されています。向かって左手には師匠格の安田鹿市、右手には児島嘉六の名前があります。年代はいずれも明治18年の記載です。

児島嘉六は仁摩町の出身、慶応3(1867)年の生まれといえますから、当時は18歳。調査を始めたころは、資料が乏しく、嘉六をこの作品の作者に仕立てていました。こんな作品を作るとは何という天才か、しばらくは寺に案内するたびに自慢していました。

しかし、鹿市の姪にあたる人から貴重な情報をいただき、製作にまつわることが少しわかりました。仁摩町生まれの鹿市は鳥取県へ年中仕事に出かけ当地で結婚しています。「龍」は左官になって6年目の時、西往寺に足を運んで作ったといえます。嘉六のことは聞けませんでした。弟子として学びながら作ったか、奉納する立場にあったのかもしれませんが。

嘉六は、後に鳥取県岩美郡国府町の森田家に二十歳で養子に入り78歳でなくなるまで現役で働きました。森田家の菩提寺に残る「嘉六翁略歴」には、「...若年ナリト雖モ技術已ニ一流の棟梁格ニシテ天才的技能八忽チ世人ノ認ムル所ナリ...」と技能と業績をたたえ、人間的にも優れていたと高く評価しています。 龍





町並みを歩く 4

～修理の現場から(古色塗り)～

この地方は昔から、柿渋、ベンガラ(弁柄)、煤などを建物の木部や生活用具に、塗り剤として使用しています。

このことがヒントになり、歴史的な町並みの保存修理がスタートする時点から、これら原料の調合を研究し「古色塗り」として再生しました。建物木部や建具に使用しています。

町並みの景観を演出する効果はもちろん、木材の風化や腐朽を防止する耐候性の塗り剤としてひろく活用しています。

最近の例では、寺院の修理に際して大工さんの試行錯誤が実を結び、柿渋に白の墨汁と少量の煤を調合した灰色の古色塗りも使用しています。



柿渋の作り方

彼岸の中日までに渋柿を採り、ヘタを取り除き数日間水に漬け置きする。取り出した実は白で搗き、サラシで搾った液を一番搾りとして使用。写真は、ハント(大甕)で保管している柿渋。残りかすも大事に使っている。



修理前



修理後



福田家物置

1465-3 SyE1

明治初期の建築(推定)。

建物は、銀山川を妻面にした切妻造り。現況は桁行き5間に物置が取り付けられているが、当初は8間の長さがあった。福田氏の所有になった昭和40年代に傷みがすすんでいた3間分を解体し、その一部の材料を再用し、小さな物置を増築している。

梁間は3間だが、建築当初は1間半の梁間で中2階を持つ切り妻形式を取っており、後に庭側へ軒を一間出している。

興味深いことに、土地の地番は、八番地の区割りの中にあつてイ番地の飛び地である。そしてその字は銀山附役人宗岡氏を連想する「宗岡ヤシキ後新田」が振られている。



さまざまな大きさの酒樽など酒造に関する道具類が保管されていた。樽は酒造の用途が終わると、醤油、味噌の樽として転用されている。

この物置は、隣家の重要文化財旧熊谷家住宅と深いつながりがある。

熊谷家は江戸時代を通じて、石見銀山御料の町役人(年寄職)や代官所の御用商人(御用達)、掛屋を勤めた家系で、江戸後期から昭和40年頃まで酒造業も営んでいた。

敷地は、昭和40年代初め頃、隣家の熊谷氏から現所有者の福田氏が購入したものである。当時は酒造に関係する土蔵や物置が立ち並んでいたことがわかっており、その部材を利用して昭和47年に代官所跡前のおおもり会館が建てられている。

また、この物置では、水車を動力とした米搗き(こめつき)が行われていたと伝えられている。万延元年(1860)の家相図と現存する井戸などの位置関係を比較すると、家相図に描かれた「水車米搗場」は一部ではあるが現在の建物位置と重なっていることが確認できる。

「石見銀山遺跡」の魅力 - 遺跡を歩く -

世界遺産登録推進室 福代光秀



石見銀山遺跡は、平成13年4月に世界遺産暫定リストに記載され、世界遺産候補となりましたが、未だに「なぜ、石見銀山遺跡が世界遺産になれるの?」という言葉が聞かれます。

それに対する回答として...石見銀山は、そこで産出され、輸出された「ソーマSoma銀」により、世界の経済に大きな影響を及ぼした時代があり、また、約400年に及ぶ歴史が、良好な遺跡として残っているという事実がある。そして、それらの特徴が世界遺産に登録される要素の一つになっている...ということが挙げられます。

そうは言うもののなかなか実感し辛い面もあるかもしれません。そこで、実際に世界遺産として実感できるところを紹介していきたいと思います。

石見銀山といえば大森の町並みを思い浮かべる人は多いと思いますが、石見銀山を石見銀山たらしめているもの、それは銀山の採掘にかかる遺跡ではないでしょうか。特に間歩と呼ばれる坑道跡、露頭掘り跡で、そのよく知られたものが大久保間歩や内部を公開している龍源寺間歩などの主だった間歩です。それら以外はあまり知られていませんが、「柵内」の南半分にあたる仙ノ山一帯に約600の採掘跡(間歩穴・露頭掘り跡)が調査によって確認されています。採掘跡の見どころとして、大谷、昆布山谷もありますが、スケールの大きさでは「本谷」が一番です。

本谷は、仙ノ山の石銀地区から南西～西に向かって下る約1kmの谷で、広範囲に間歩、露頭掘り跡が分布しており、銀山最大の久保間歩のある谷として知られています。

それでは、本谷を歩いてみましょう。水上の方の市道原田線の終点には駐車場がありますので、そこに車を止め、少し引き返して山道を登りはじめます。現在、この谷は遊歩道整備のため、下から大久保間歩までは工事中であり、途中の金生坑までは仮設道が出来て歩きやすくなっています。なお、工事の際は危険ですので、注意して登ります。市道原田線と交わる入口から約200m歩くと右手に赤い幟のあるお宮が見えてきます。その少し先からが、銀山本体である「柵内」です。このあたりを当時は本谷口といい、口番所がおかれまして。ここからまた約

200m登ると、仮設道の終点となります。この右手に坑道「金生坑」があります。坑道の入口は土砂によって塞がれていますが、入口に向かっての両サイドには、きれいに石垣が積まれており、きちんと整備されていた様子わかります。

金生坑と仮設道から離れ、沢沿いの山道に入っていきます。段々両サイドの山が迫ってきて谷が深くなり、金生坑のあたりから約150mくらいのところで、左手に平坦な杉林が現れます。ここに何かの建物(四ツ留番所?)があったと思われ、沢をはさんでその反対側に「大久保間歩」があります。(安全のために坑口には、鉄柵がしてあり、中の様子はインターネットでしか見られません。ちなみに先程の金生坑とは斜坑・竪坑で結ばれています。)

大久保間歩から上は、沢筋を少し登るようになり、沢から離れて山道を歩くようになると少しずつ道に沿って平坦面(テラス)が出てきます。このテラスに建物(住居等)があったのではとされています。また少し歩き、大久保間歩から約150mくらい来ると、谷が二つに分かれます。左の谷が、「安原谷」で、安原伝兵衛(備中守)の霊所と言われるところや安原坑が見られます。本谷は右の谷で、あとここから約500mで、終点の石銀の林道に出ますが、そのはじめ約半分の区間で「釜屋間歩」、「本間歩」、東西方向に鉱脈を追って掘られたのではないと思われる数々の露頭掘りの跡を見ることが出来ます。この場所で、石見銀山遺跡の「雄大さ」が感じられるのではないのでしょうか。



水飲み場

資料紹介

6

大久保石見守長安の書状

松岡美幸

石見銀山の歴史文献調査にあわせて、石見銀山に関連する資料の収集もこれまでに行ってきましたが、この度「大久保長安書状」と「高野了喜（地役人）書状」の2点を購入することができました。この2点の書状は、史料の大変少ない江戸時代初期のものであり、今後の石見銀山研究にとっても大変貴重な史料と言えるでしょう。ここでは主に大久保長安の書状について紹介したいと思います。

大久保石見守長安は徳川家康の重臣で、江戸幕府の財政基盤を整える時期に、大いに活躍をした人物としてよく知られています。鉱山に関しても詳しく、石見・佐渡・伊豆の鉱山開発を指導し、17世紀初期に日本の産銀を大增産させました。長安が石見国の初代奉行として赴任したこの時期に、石見銀山も最も繁栄したとされています。

石見銀山に関する長安の書状は、これまでも地役人宅数軒に遺っていることが分かっています。この書状も地役人3名（今井宗玄・吉岡右近・宗岡弥右衛門）に宛てたもので、年未詳ですが慶長8年（1603）以降のものと思われる。石見に常駐していなかった長安は、常々地役人から手紙で情報を受け取り、それに対してのコメントや指導を手紙で返信していました。この書状もそのようなやり取りの一部です。

この地役人3名は、この時期に中心的な役割を果たしていた人物で内容を見ると、輸送用の人馬の手配についてのことが中心のようですが、「人馬が不足しているので尾道・高山（甲山）・三吉（三次）

で人馬を借りること、赤名で人馬を継立てること」などを指示しており、おそらく銀の輸送に関するものと思われます。これまでに江戸時代中・後期の史料から「助郷」（街道筋周辺の村々に人馬を提供させる制度）によって銀が輸送されていたことが分かっていたましたが、このルートを確認したとされる

銀の輸送ルート（略図）



（『資料で見る石見銀山の歴史』石見銀山資料館より）

長安支配時代の史料としては初見史料と言えます。

ところで購入した2点の書状の面白い点は、裏面にも文字が書かれている事です。表側の内容が用済みとなった時、裏面を帳面に仕立て、覚書き帳として再利用したもののようです。紙が貴重であった時代にはよく行われており、このような文書を「紙背文書」と呼んでいます。特に「高野了喜書状」の紙背には「吉出雲様への酒之通」と題する覚書があり、先の書状の宛名のうち吉岡右近の父・吉岡出雲の酒の「通い帳」（購入金額・日付などを記し、後払いの覚書とするもの）であるようです。2点の書状は同じ帳面に綴ってあったようですが、この紙背文書からこの2点が吉岡家に宛てた書状（吉岡家文書）であることが分かります。一度は反故にされた貴重な史料をこうして入手できたことは、本当に幸運なことと言えるでしょう。



大久保石見守長安書状（年未詳9月26日）



高野了喜書状（年未詳9月晦日）の紙背文書

石見銀山遺跡調査活動日誌抄

上半期・平成14年4月～10月

	8/26
	8/25～9/1
	8/27
	8/28～8/31
	9/5
	9/6
	9/8
	9/10・11
	9/12～13
7～31	
5/27～30	
6/1	9/13
6/7～7/21	9/18
6/10～14	9/18
6/11	9/19～2
6/21～7/12	
7/8	9/25
7/10	9/28
7/13	
7/15～9/30	9下旬
7/17～18	10/3～4
7/18	10/4
7/18～8/8	
7/23～26	10/5
7/28	10/8
7/30	10/11
7/31	10/16
8/2	10/17
8/5	10/22
8/5	10/23
8/11	
8/19～23	10/26
8/20	10/27
	10/28
8/23	10/29